

ツァラと日本の作家たち——瀧口修造、 坂口安吾、横光利一

塚 原 史

1 ダダとクレオパトラの鼻

「クレオパトラの鼻がもっと短かったら、その後の世界のあらゆる顔つきは変わっていただろう」（日本では「クレオパトラの鼻が低かったら、世界の歴史は変わっていただろう」と訳されるのが通例だが、原文を直訳しておく。「鼻」と「顔」を関連させた表現である）⁽¹⁾——一七世紀フランスの天才的数学者・哲学者・物理学者ブレーズ・パスカルが、三十代の頃（といっても三九歳で没したから「晩年」ともいえるが）『パンセ』第一六二節（ブランシュヴィック版）に書きつけた、このあまりにも名高い警句は、歴史における偶然と必然の結びつきを直観的に示唆した名言であり、人類の知的「世界遺産」ともいえる一文となっている（山河や建築ばかりでなく、こうした文章も World Heritage にじゅうぶん値するのではないだろうか。ピラミッドが崩れ落ちたとしても、パスカルの言葉は消えないのだから。）

昔の作家や批評家ならここで「閑話休題」と記すところだが、話を現代アート（Modern Art/Contemporary Art）の起源に向けると、そこには二人の「クレオパトラ」が登場する。といっても残念ながらどちらも男性だが、彼らがいなかったら現代アートの「あらゆる顔つき＝その後の歴史」は一変していただろう。もちろん、DADAの創始者トリスタン・ツァラ（Tristan Tzara 1896-1963）とREADY MADEの最初の実践者マルセル・デュシャン（Marcel Duchamp 1887-1968）のことである。

詳細は省くが、一九一六年二月、第一次世界大戦下の中立都市チューリッ

ヒにドイツの詩人フーゴ・バルがオープンした居酒屋兼小劇場「キャバレー・ヴォルテール」で反芸術の企てを開始してダダと名づけ、一九一八年に「ダダは何も意味しない」「誰もが叫べ。破壊と否定の大仕事を成し遂げるのだ。掃き出せ、洗い流せ」⁽²⁾と吠えたツェラと、それに先立つ一九一三年から木製の丸椅子に自転車の車輪を載せて固定したオブジェなどをレディ・メイド（既製品——丸椅子も車輪も「作家」が作ったものではない）と名づけ、一九一七年には、白い陶製の小便器を買ってきてF O U N T A I Nと題してニューヨークのアンデパンダン展に出品して「作家」と「作品」の概念を否認したデュシャン（この「作品」は「泉」と訳されるが、人工的なものだから語義的には「噴水」である。ただし、アングルの裸体画F O N T A I N Eを参照項としているとすれば「泉」でもよいだろう）、この二人がそれ以後の世界的アートシーンを一変させたことは、あえて強調するまでもないだろう。

そんなダダイストの「クレオパトラ」たちは、シーザーやアントニウスといった古代の英雄の代わりに、パリ、ベルリン、ニューヨークから東京まで、二〇世紀初頭のメトロポリスの有名無名のアーティストたちを誘惑することになる。人間的な英雄たちの時代はとくに終わっていたから、「神々の黄昏」の後で戦われた最初の世界戦争（1914-1918）では、ナポレオンやクツゾフよりフランスの戦車ルノーF 17やドイツの潜水艦Uボートが「英雄」だったのである。じっさい、レディ・メイドばかりでなく、未来派のマリネッティは自動車（イタリア語ではマキーナ）の速度の美を謳い上げたし、ピカビアは初期作品（「愛のパラード」や「母親なしに生まれた娘」など）で機械を擬人化していた。

ダダのキューピッドの矢が地球を半周して極東の島国に到着し、一人の若者のハートを射抜いたのは、ヨーロッパの大戦争が終わって間もない一九二〇年（大正九年）のことだった。トリヴィアに渉るが、日本では第一回メーデーと第一回箱根駅伝が挙行され、アメリカでは最初の広域ラジオ放送が始

まった年である。

こう書くと、歴史的な大事件が起こった年ではなさそうだが、一九二〇年前後には社会革命の領域で重要な動きがあった。一九一九年、社会主義ロシアの首都モスクワで創設されたコミンテルン（国際共産党）に続いて、一九二〇年にはフランス共産党、一九二一年には中国、イタリア共産党、一九二二年には日本共産党が結成されたのである。そして、この年、一九二二年には、ムッソリーニの「ローマ進軍」によってイタリアで世界最初のファシスト政権（残念ながら最後ではなかった）が生まれるのだから、世界は第一次大戦後の相対的安定期から激動の両大戦間の時代へと移行しつつあった。

一九二〇年八月一五日、黒岩涙香により一八九二年に創刊された大衆新聞「萬朝報」は「“享楽主義の最新芸術”——戦後に歓迎されつつあるダダイズム」という記事を掲載し、日本で最初にダダイズムのことを報じたのだが、四国は愛媛県八幡浜在住の一九歳の若者高橋新吉（1901-1987）は紫蘭という人物（筆名だろうが身元不詳）によるこの文章に大感激して、ツェラのダダ宣言などまったく読まずに（高橋は外国語を知らなかったようだし、当時はもちろん日本語訳などなかった）勤務先だった八幡浜新聞に「ダダ仏問答」なる一文を掲載し、翌一九二一年、私たちの国で最初のダダ詩集『まくはうり詩集』DA1を自費出版する⁽³⁾。そして、一九二三年には『ダダイスト新吉の詩』を辻潤編佐藤春夫序文で中央美術社から出版するのである。

こうした日本のダダ草創期のエピソードはかなり知られていると思うが、この段階ではツェラの宣言や詩篇はまだフランス語の原テキストから紹介されてはいなかった。それらが原文から邦訳されるのは、いったいいつ頃からだろうか。

本稿ではこの単純な疑問から出発して、ツェラと日本の作家たちとの関係に少しばかり再接近することにしよう（「再接近」と書いたのは、このテーマに関してはこれまでもいくつか言及があるが、ツェラの原文と照合したものはあまり見当たらないので、その辺に焦点を合わせたいという趣旨であ

る)。

2 瀧口修造・上田敏雄

ツァラのダダ宣言の一部が最初にフランス語から邦訳されたのは、富士原清一発行、北園克衛編集によって一九二七年（昭和二年）一一月に創刊された文芸誌『薔薇・魔術・学説』の第三号（一九二八年二月、この号で終刊となった）に掲載された上田敏雄の訳文だと思われる。訳者がツァラの原文を一部そのまま引用していることから、英語訳からではなくてフランス語原文から訳出されたことは確実だろう。上田敏雄（1900-1982）は山口県出身、慶応義塾大学英文科で西脇順三郎に師事したシュルレアリスム系の詩人・研究者で、弟の詩人・英文学者の上田保とともに『薔薇・魔術・学説』に参加している。

本邦初訳といっても、この雑誌に訳出されたツァラのテキストはごく短いもので（訳文は全部で三〇行程度）、Annexe : comment je suis devenu charmant sympathique et délicieux / dada VII / dada X の三篇だった。出典の表示はないが、いずれもツァラが一九二〇年一二月九日にパリのボヴォロスキー画廊で発表した「かよい愛とほろにがい愛についてダダが宣言する（Dada manifeste sur l'amour faible et l'amour amer）」から数行ずつ引用されている。この「宣言」はI～XVIの短文と付録「おれはどうやって魅力的で感じがよくて愛らしくなったか」から成るが（全体としてはツァラのマニフェストでいちばん長い）、上田は付録と第七・第一〇を選んだわけである。しかしそうした注記はなく、dada VIIなどが作品名のように見えてしまうが、独立した題名ではない。また、このダダ宣言は、新聞記事を切り刻んで袋に入れランダムに取り出すという「ダダの作詩法」を提案して、ツァラの世界的「悪名」に貢献したのだが、そのことにはまったくふれられていない⁽⁴⁾。

とはいえ、一九二〇年に「萬朝報」の新聞記事（という「作詩法」を思

い浮かべてしまうが)で紹介されてから七年後に、ようやくごく一部でも原文から訳されたのだから、ここで原文と筆者の訳文付きで紹介しておこう。

dada VII

(上田敏雄訳)

先験物 A priori 言ひ直せば閉ざされた眼を DADA は該行動の前面に又全部の上方に置く：疑問 Le Doute。DADA は全部を疑惑と思ふ。DaDa は禁制物 tabou なり。全部は Dada なり。君達は DaDa を疑はしく思へ。

反だだいずむ L'anti-dadaïsme は一つの病気である：自己窃盗狂である 人間の正常な状態は DADA である。

併し眞実のただ dadas は DADA に反対である。

(塚原訳)

先験的に、つまり両目を閉じて、ダダが行動する前とあらゆるものの前に置くのは、疑いだ。DADA はすべて (tout) を疑う。ダダは刺青 (tatou) だ。ダダに気がつけたまえ。

反ダダイズムは、ひとつの病気である。自己窃盗狂という病気、人間の正常な状態が DADA なのだ。

だが、ほんもののダダたちは DADA に反対している。

(ツァラ原文)

A priori, c'est-à-dire les yeux fermés, Dada place avant l'action et au-dessus de tout : Le Doute. Dada est tatou. Tout est Dada. Méfiez-vous de Dada.

L'anti-dadaïsme est une maladie : le self cleptomanie,

L'état normal de l'homme est DADA.

Mais les vrais dasas sont contre DADA.

上田訳は最初の文の文法的理解に問題があるが（「ダダが置く」のは「眼」ではなくて「疑い」である）ダダの雰囲気をよく伝えているとはいえ、一箇所意味深い誤読がある。Dada est tatou. Tout est Dada. の箇所では tatou を tabou と読み違えているのだ。原文の発音は「ダダエタトゥー・トゥーテダダ」で、言葉遊びの表現になっているが、唐突に出てくる「刺青」という単語がおそらく上田の想定範囲を越えていたために、彼はその前の「すべてを疑う」との関連で「タブー」と思いこんで、わざわざ原語まで併記したのである。もっとも、ツェラ自身もダダの起源であるアフリカ、オセアニア先住民の文化の連想から「タトゥー」を選んだと思われるから、「タブー」と「タトゥー」は無縁ではないとも言えそうである⁽⁵⁾。

『薔薇・魔術・学説』復刻版に付された北園克衛の《「薔薇魔術学説」の回想》によれば、北川と上田兄弟は一九二七年に連名で A NOTE DECEMBER 1927 と題する短いマニフェストを発表し（上田敏雄起草）、「このマニフェストは英訳して、パリのシュルレアリストたちに発送された」というが、そこには「吾々は SURREALISME を継続する」とあって、彼らの気概がうかがわれる（もっとも、パリで反応があったかどうかは定かでない）。

*

ツェラの詩と詩論の本格的な導入は、瀧口修造（1903-1979）が一九二九年に発表した論考「ダダと超現実主義」によってなされた。瀧口が日本におけるシュルレアリスムのもっとも重要な研究者で実践者の一人だったことは言うまでもないだろう。その経歴などはよく知られているのでごく概略を記せば、瀧口修造は富山市で代々医師の家庭に生まれ、慶応義塾大学英文科に学んで、オックスフォード留学から帰国したばかりの西脇順三郎の教えを受け、一九二七年、西脇らとともにシュルレアリスム詩集「馥郁タル火夫ヨ」を刊行、一九三〇年にはブルトン『シュルレアリスムと絵画』を邦訳し、以

後日本のシュルレアリスム探究の中心的存在となった。

太平洋戦争中はまったく根拠のないコミンテルンなどとの関係を疑われ、一九四一年に治安維持法で検挙、八ヶ月拘留された。哲学者三木清（1907-1945）の投獄と獄死（同じ豊玉刑務所だった）とともに、日本軍国主義の無知と野蛮をさらけだした忘れ難い事件である。戦後は海外のシュルレアリストと交流、一九五八年にはヴェネツィア・ビエンナーレ日本代表として渡欧し数ヶ月滞在、この間ブルトンをパリ・フォンテーヌ街のアトリエに訪れている。その後読売アンデパンダン展を主導し、荒川修作ら当時の前衛的アーティストに理解を示して、生涯アヴァンギャルドを現在形で模索し続けたと言えるだろう。

「ダダと超現実主義」は、一九二九年一月に厚生閣から出版された西脇順三郎著『超現実主義詩論』の付論として「ダダよりシュルレアリスムへ」の表題で発表され、同年一二月に金星堂から刊行された『現代詩講座』第三卷『世界新興詩派研究』に「ダダと超現実主義」とタイトルを改めて加筆の上収録された⁽⁶⁾。

瀧口はすでに一九二八年に「シュルレアリスムの詩論に就いて」を文藝春秋社発行の『創作月刊』に発表して、ツァラに言及していたが、そこでは一九二四年のブルトン『シュルレアリスム宣言』の紹介が主題だったから（ブルトンによる名高いシュルレアリスムの定義は「口頭或は文字その他凡ゆる方法に於て思想の真実の作用を現さんとする純粋な心理的自動性」と、正確に訳されていた）、ダダイスト・ツァラの詩と詩論を日本で初めて原テキストに即して論じたのは「ダダと超現実主義」だったということになる。

この一九二九年の歴史的文章には、こう書かれていた。

トリスタン・ツァラの宣言書はあらゆる既成状態への否定意志の結晶であると同時に、その態度は高貴な論理によって、ひとつの精神構成によって飾られている。抽象的な極大の否定はひとつの純粋な肯定に到達すると

ということがいわれないであろうか。ダダにおいて、反語は、ひとつの独特な真理を有している。すなわちあらゆるものを犠牲にして、ひとつの単純な活動性をダダは獲得したのである。人間が語るすべては詩であるというような確信、あるいは新聞の切抜きやそれらの偶然の配置で詩を作ると公言するようなツァラの方法が、詩における無限の虚的空間を創造したのである。

その上で、瀧口は「トリスタン・ツァラは原理の美声をもつものである。唯一の必然と偶然との真理が彼の詩であった。〔…〕彼は詩の世界における奢侈な唯一の魔術師である。この微妙なる排泄物を見よ」と述べて、ツァラが一九二〇年六月にパリで出版した詩集 CINÉMA CALENDRIER DU COEUR ABSTRAIT MAISONS から詩篇を一つ選んで邦訳を試みている。この詩集には「シネマ抽象的な心のカレンダー」の二〇の詩篇と「メゾン」の一二の詩篇が収められているが、瀧口が選んだのは前者の一番目の作品だった。以下に瀧口訳と原文を併記する。瀧口修造の訳文は、論考中の試訳とはいえ完成度の高いものなので筆者の訳文は省いたが、一行目の「購ウ」は原文が *il vend* なので「売ル」が正しい。

蝸牛へ吹ク風 ソレハ駝鳥ノ羽毛ヲ購ウ雪崩ノ感動ノ嵐
 自動答刑ハ海底デ作用スル
 花瓶等装飾ノ戸外ノ消エ失セタ砂漠
 伝達ノ車ハ一人ノ脂肪質ノ女子ヲ運ブ
 香料デ穿孔シタ羊皮紙ノ野原
 ソレハ腸ノタメノ扇ノ効用ヲ理解スル
 大時計ノ血管ノ中ノ軽快ナ貨幣流通ハ出発ノ欲望ノ正確ヲ示ス

ツァラ「抽象的な心臓のカレンダー映画」

(一九二〇)

vent pour l'escargot il vend des plumes d'autruche
vend des sensations d'avalanche
l'auto-flagellation travaille sous mer
et des déserts évanouis en plein air à decoration
vases
la roue de transmission apporte une femme trop grasse
champs de parchemin troués par les pastilles
qui a compris l'utilise des éventails pour intestins
légère circulation d'argent dans les veines de l'horloge
présente la précision du désir de partir

CINÉMA CALENDRIER DU COEUR ABSTRAIT MAISONS⁽⁷⁾

原文の読解に関しては、「花瓶等」は前行と切り離せるだろうし、「一人ノ脂肪質ノ女子」は「でっぷりと太りすぎた女」でもよさそうだが、あえて物質的な訳語を用いて「無限の虚的空間」の「微妙なる排泄物」を表現しようとした訳者の意図が感じられる名訳である。

「ダダと超現実主義」の初めのほうでも、瀧口修造は「ツァラはダダの感性所有者であった。彼は虚無のなかに切断されたあらゆる彫像への無比の感受性の所有者であった。〔…〕 彼は無意識界のあらゆる官能的刺激を把握した魔術的詩人である」と述べていていたが、彼が強調したツァラの「魔術」性は、当時から最近まで他の論者にはあまり見られない指摘であり、再検討に値すると言えそうである（ツァラのサーカスの団長的性格は有名だが、「魔術」というとブルトン『魔術的芸術』などシュルレアリスムの作品が想起される）。たしかに、前述の「ダダの作詩法」が「帽子のなかの言葉」と呼ばれたように、このダダイストはシルクハットから鳩を翔び立たせる手品師を自認していたのだが、こうしたキャラクターは、彼が一九三〇年代以降

コミュニズムに接近する過程で消え去っていくことになる。

3 坂口安吾

瀧口修造や上田敏雄は慶應でフランス語を学んだ（慶應の仏文は一九一〇年に永井荷風が文学部主任教授として赴任以来の伝統をもつ。早稲田では一九二〇年に吉江喬松がフランス留学から帰ってから仏文科が創設された）、いわば正統派の知識人だったが、同じ頃語学学校でコツコツとフランス語を勉強してツァラに挑戦した作家がいた。若き日の坂口安吾（1906-1955）である。安吾は地元の有力政治家を父として新潟市に生まれたが、学校嫌いで中学校の途中から父や兄と東京に移住、その後東洋大学印度哲学科に通う頃から御茶の水のアテネ・フランセでフランス語を猛勉強している。

一九三〇年、大学卒業の年に、安吾はアテネ・フランセの友人たちと同人誌『言葉』を創刊、同じ年に北園克衛がシュルレアリスム系の雑誌「L'ESPÉRIT NOUVEAU」（新精神）を紀伊國屋書店から出版。翌一九三一年七月発行の同誌第二巻第二号に、二五歳の安吾はツァラの詩集 *De nos oiseaux* 「ぼくらの鳥たちについて」から三篇の詩を翻訳して発表している。JE SORS DE MON APPARTEMENT SOMPTUEUX, UN BEAU MATIN AUX DENTS FERMÉS, CRIME DISTINGUÉ である⁽⁸⁾。この詩集は、手元にある一九二九年クラ書店刊の初版（アルプのデッサン付き）によれば一九一二年から一九二二年まで一年間にツァラが書いたとされる詩を数十篇集めたもので、ルーマニア時代からチューリッヒ・ダダをへてパリ・ダダまで、若き詩人ツァラ（一九二二年で二六歳）の全貌が俯瞰できる貴重な書物だが、一九二九年版にいたる過程はかなり曲折したものだった。

一九二三年七月、パリ・ダダ最後の「興行」となったテアトル・ミッシェルでのブルトン一派との乱闘騒ぎの直後に、ツァラは詩集『ぼくらの鳥たちについて』をストック書店から刊行する準備を終え、印刷も完了していた。ところが、書店の事情で突如出版不能となってしまう。したがって、幻の一

九二三年版が存在するわけである。その後、ツァラはガリマール書店など他の大手出版社に話もちかけが不調に終わり、結局一九二九年になって、パリ九区ロディエ街五六番地のクラ書店からようやく刊行されることになる⁽⁹⁾。正規のルートで出版販売されるフランスの書籍は「法定献本 (dépot légal)」の年月を記載しなくてはならないが、クラ版にはそれがないのでいわば私家版として流通したのかもしれない（「鳥たち」という表題は、フランソワ・ビュオの『ツァラ伝』によれば、一九二三年二月にパリ在住ロシア人アーティストが主催し、ツァラも参加したパーティーの演目に由来するという）。

それでは、坂口安吾の訳文を筆者の訳文とツァラの原文付きでお目にかけよう。安吾訳の底本は明記されていないが、当時（おそらく北園克衛と紀伊國屋書店経由で）参照できたのは一九二九年クラ版原書しかないはずである。しかし、翻訳の順番が原書では CRIME DISTINGUÉ (p.58) → JE SORS DE MON APPARTEMENT SOMPTUEUX (p.64) → UN BEAU MATIN AUX DENTS FERMÉS (p.66) で、安吾訳の順番と異なっているので、別の紹介文や原書の部分的複写などに拠った可能性もないわけではない。

（坂口訳）

我等の鳥類——トリスタン・ツァラ

私は豪奢なアパートから外出する

冬は我等を食べる

シガレットは金色の粉末に

チョコンダのボンデュウルは

みなさんにボンデュウルを言ふ

けだものの疲労は鳴り渡る
食塩の袋の上に空気の蝶の上に懊悩の袋の上に
しかし光は肉食を好み
そしてヂョコンダのボンヂュウルは
今日は寒い今日は寒い
みなさんにボンヂュウルを言ふ
人々丸い目を網の上にブラブラし
水平に
丸い目足の先に踊り
今日は寒い今日は寒い声は硝子瓶の中に
閉じ籠って
今日は寒い路の上に重たい
そして風は光を路へ押し流し
路一杯に口笛吹き鳴らすものはヂョコンダのボンヂュウル
まるで路の自動車のやうに自転車のやうに飛行機のやうにオオトバイのやう
に

冬は我等を食べる
我等シガレットの金色の粉末に
盛大なる紳士たち

(塚原訳)

ぼくは豪華なぼくのアパルトマンから外出する (1921)

冬がぼくらを食る
金粉のシガレット
モナリザのボンジュールが

皆にボンジュールと言う

塩と空中の蝶々と苦痛の袋の上で
動物たちの疲労がベルを鳴らす
でも食人種の光線と
モナリザのボンジュールが
今日は寒いね今日は寒いね
いつも皆にボンジュールと言う

誰かがロープの上で眼を開けてバランスを取って揺れる
開いた眼が爪先立ちで踊る
閉じた声の瓶の中で今日は寒いね寒いね
路上で今日は寒いね重いね
そして風が光を街道に押し出す
街道沿いに口笛を吹くのはモナリザのボンジュール
路上のその他の自動車自転車飛行機オートバイのように

冬がぼくらを食る
ぼくらは金粉のシガレットの吸い口だ
上品な紳士たち

(ツァラ原文)

JE SORS DE MON APPARTEMENT SOMPTUEUX (1921)

l'hiver nous dévore
cigarette en poudre d'or
le bonjour de la joyonde

dit bonjour à tout le monde

la fatigue des animaux sonne
sur les sacs de sel et de papillons d'air et de douleur
mais la lumière carnivore
et le bonjour de la joconde
il fait froid il fait froid
disent toujours bonjour à tout le monde

on se balance les yeux ouverts sur la corde en équilibre
les yeux ouverts dansent sur la pointe des pieds
il fait froid froid dans la bouteille de la voix fermée
et le vent pousse la lumière sur la route
c'est un bonjour de joconde qui siffle tout le long de la route
comme les autres autos vélos aéros motos sur la route

l'hiver nous dévore
nous les bouts d'or des cigarettes en poudre d'or
les gens distingués

(坂口訳)

とある朝菌を食ひしめて

余は列車を音ある羽に変ぜしむ
故国にただ一匹の昆虫住み
金色の鼻孔持てる家屋は
正確なる言葉もて充満さる

空気の及び空気の神経の
朝の梯子を切断せん
虹色の論争の中に苦痛の叫喚の中に
なぜ空気の白色を睨むか

(塚原訳)

ある朝歯を食いしばって (1921)

ぼくは汽車を音の出る羽根に変える
この地方には一種類の昆虫しかいない
黄金の鼻孔のついた家には
正確な文章があふれてる

空気の朝の梯子と
空気の神経を切り取ろう
虹色に輝く差異と痛みの叫びの形に
なぜたがいに見つめ合うのか 白い空気の中で

(ツァラ原文)

UN BEAU MATIN AUX DENTS FERMÉS (1921)

je change le train en plume sonore
le pays n'a qu'un seul insecte
la maison aux narines d'or
est remplie de phrases correctes

découpons l'échelle matinale
de l'air et les nerfs de l'air
en différences irisées en cris de mal
pourquoi se regarder dans le blanc de l'air

(坂口訳)

重大なる犯罪

夜光虫の薔薇色衣装
厚い霜のゼライチン
獣の皮
医師はあまたの仕事に
その仕事渉らない
少年よ少年よ
皇后は叫んだ
少女は
ぽとりと息絶えた
それは少年であった

(塚原訳)

上品な犯罪 (1921)

蛍たちの薔薇色のドレス
ゼラチン 霧氷が密生する
動物の革
うまく行かない
仕事のための医者

ボーイ ボーイ

后妃が叫ぶと

若い娘が倒れて死んだ

それがボーイだった

(ツァラ原文)

CRIME DISTINGUÉ (1921)

une robe rose de lucioles

gélatine givre dru

cuir

médecin pour les affaires

qui ne marchent pas

boy boy

cria l'impératrice

la jeune fille

tomba morte

c'était le boy

(DE NOS OISEAUX 1923-1929)

ツァラの詩の原文自体はそれほど複雑ではないが、『ぼくらの鳥たちについて』の詩篇中では、単語の接続や意味のつながりが伝統的なフランス語の統語法を困惑させ、動揺させている。ツァラやブルトンの友人だったフィリップ・スーポーは、一九二三年に「〔詩的言語の〕大混乱の接近が、『ぼくらの鳥たちについて』のすべての詩句によって予告されている」と興奮気味に書いたほどだった⁽¹⁰⁾。したがって、通りのよい日本語に直す必要はないのだから（筆者の訳はこなれすぎているかもしれない）、坂口訳は瀧口訳とは

ちがった意味で、ダダ詩篇の言語感覚を伝えているとも言えるだろう。上記作品を書いた一九二一年にツァラは二五歳で、一九三一年の安吾と同年齢だったし、ツァラにとっても（中学校以来バイリンガルの教育を受けてはいたが）フランス語は母語ではなかったのだから、日本の若者とルーマニア出身のほぼ同時代の若者の言語感覚に、どこか共通するものがあったとしても不思議ではなかった。

この時のツァラ体験以後、坂口安吾は直接ツァラとダダについて語ることはなかったようだが、彼の反逆精神はダダあるいはシュルレアリスムに通じるものだったかもしれない。安吾自身がダダイストやシュルリアリストを気取っていたわけではないが、一九三二年の評論「F A R C Eに就いて」で、彼はこう述べていた。

一体、人々は「空想」という文字を、「現実」に対立させて考へるのが間違ひの元である。〔…〕人間自身の存在が「現実」であるならば、現に其の人間によって生み出される空想が、単に、形が無いからと言って、なんで「現実」でないことがある⁽¹¹⁾。

現実生活から空想の世界を出現させる能力をもつ人間にとって、「空想」もまた「現実」であるという発想は、「生活のいちばんはかない〔仮象的な〕部分、つまり現実生活への信頼が嵩じすぎると、それは壊れてしまう」「親愛なる想像力よ、私がとくにお前の中で愛するものは、お前がけって許さないことだ」といった一九二四年のブルトン『シュルレアリスム宣言』の冒頭の表現を想起させる。

また安吾が一九三三年に発表した評論「新しき文学」の中の次の箇所は、ツァラ「ダダ宣言一九一八」の「否定と破壊の大仕事を成し遂げるのだ」（前出）という、あの絶叫とも響きあっていたのではなかっただろうか⁽¹²⁾。

私の考へによれば、芸術は反撥精神のあらはれであり、時代創造的な激しい意志によって為さるべきものであると思はれるに拘らず、最近日本文学の新しい傾向は、老人の趣味に一致することを最も純粋と見做し、最も無気力な、自慰的な人間探究に過った亢奮を感じてゐる。〔…〕私の考へによれば、文学の作用は常に反逆的、闘争的、破壊的である。〔…〕時代創造的な意思は、文学に於ては反逆的、破壊的な形に於てあらわれる⁽¹³⁾。

4 横光利一

ここまでは、瀧口修造、上田敏雄、坂口安吾によるツァラ邦訳の先駆的な試み取り上げてきた。それらはいずれも、このダダイストとのテクストを通じた出会いであり、彼らがツァラ本人と出会ったわけではなかったが、一九三六年にパリで、ツァラ本人との会見を果たした日本の作家がいた。横光利一(1898-1947)である。

横光利一は福島県に生まれ(本籍は大分で、中学は三重)、早稲田大学英文科から政治経済学部へ転じて中退、作家生活に入り文芸春秋の菊池寛に師事、川端康成とともに新感覚派と呼ばれた。『日輪』『上海』『機械』などの小説で知られ、一九三五年には新設の芥川賞選考委員となり文壇的地位を確立、翌一九三六年二月から八月までヨーロッパ諸国を周遊した。日本では二・二六事件(出発直後)、フランスでは人民戦線内閣成立、ドイツではナチス政権下のベルリン五輪開催といった大事件と重なる時期である。

その一九三六年六月、当時三八歳の横光利一は、当時二五歳だったパリ在住の岡本太郎(1911-1996)に誘われて、モンマルトルはサクレクール寺院裏手のアヴニュー・ジュノー一五番地のツァラ邸を訪れている(余談だがこの通りは現在でも高級住宅地で、マンションの一平米単価は一万〜二万ユーロという)。横光は、ツァラの第一印象を作品中でこう表現していた(詩の邦訳の引用は原則として原文に従ったが、以下の引用は小説や紀行文なので

原則として旧仮名旧字を新仮名新字に直した)。

ツァラアは少し猫背に見える。背は低いがしっかりした身体である。声も低く目立たない。しかし、こういう表面絶えず受身に見える人物は流れの底を知っている」(「厨房日記」)⁽¹⁴⁾

その夜、ツァラが「もう良識は左翼以外にはない。それは決まった」とつぶやいてグラスを挙げたと、横光はつけ加えているが、ツァラが日本の作家・文化人と親しく接した記録が残っているのは、この時が最初で最後のようだから「歴史的」な訪問ということになる⁽¹⁵⁾。他の場所でもふれておいたが⁽¹⁶⁾、作家自身の言葉で振り返っておこう。

会見は『欧州紀行』(一九三七年)によれば六月一二日夜のことで、「女流詩人四五人と、カイヨウ〔カイヨウ〕と云う作家〔社会学者・批評家〕、及び彫刻家のジャコメッティ等」が集まっていた。横光はツァラ(「ツァラア」と表記)を「ダダイズムの始祖、及び超現実派の宗家」と紹介しているが、この夜の記述はごく短いもので、「集るフランス人の話はすべて罷業〔ストライキ〕の話ばかり」で、「ピカソが左傾をしてバスティユ騒動の壁画〔実際には「ゲルニカ」のこと〕を描くという話」を「ピカソの友人の女流詩人が〔…〕この夜ツァラアに囁いていた」とあるだけだ⁽¹⁷⁾。

もっと詳しい描写が前出の短編小説「厨房日記」(初出は一九三七年一月雑誌『改造』)中に見つかることは、今ではかなり知られているだろう。

「こういう事があったと梶が妻の芳江に話した」という一文で始まるこの作品は、東北の海岸の温泉場に、外遊の疲れを癒しに来た主人公梶が語る滞欧中の体験談のかたちをとっているが、そこにはいくつかの重大な事実誤認が見られる。

横光の原作からの詳細な引用は省略するが、まず「スイスのある都会にあった出来事」として、チューリッヒ・ダダの発足について述べたとしか思え

ない箇所は「シュールリアリズムという心理形式の発会式」となっていて、ダダはひと言も出てこない。シュルレアリスムが第一次大戦中のダダの逆逆に刺激されて戦後パリで始まったことは、西脇順三郎や瀧口修造らをつうじて同時代の日本でもよく知られていたのだから、ダダについて予備知識がなかった、あるいは故意にダダを無視していたとも思える大きな間違いだし、「心理形式」という表現も的外れだ。

ツァラの名前自体は、この箇所には登場せず「その一団の大將はルーマニア人で詩人だ」とあるだけだが、これではツァラがシュルレアリスムを率いたことになり、今度はブルトンを無視したことになる。その「大將」が「発会式」に市長はじめ地元の名士を招待してすっぽかしたという話が、梶からもっともらしく語られる。しかし、もちろんそんな事実はどこにもなかったのだから、小説とはいえあまりにも不正確な記述である。

そのあとで、パリのツァラ邸訪問の様子が『欧州紀行』よりはるかに詳細に描かれているが、そこでも「スイスのシュールリアリストたちの発会式の時彼ら一団の頭目であったトリスタン・ツァラア」となっていて、なぜか『欧州紀行』にあった「ダダイズム」への言及が消えている。（ツァラの評判に関して「現在のフランス詩壇では彼に追随するものが一人もないと云われるほど絶対の権威を持続するまでにいたっている」とまで持ち上げているのは、岡本太郎経由の情報によるものだろうか。）

また、ツァラ邸を「モンマルトルにあるクロイゲルの娘の家」と記しているのも誤りである。ツァラの妻でスウェーデン人のグレッタ・クヌットソンの父が、一時世界のマッチ産業を牛耳って「マッチ王」と呼ばれたが事業が破綻して一九三二年にパリで自殺したスウェーデンの実業家イヴァール・クロイガー（Ivar Kreuger 1880-1932）だという当時パリの一部で流布していたらしい俗説を（おそらく岡本太郎から聞いて）そのまま記したものでしょうが、事実ではなかった。グレッタの父はストックホルムの裕福な音楽家だったのだが、横光の意図は、俗説に依拠して詐欺師の実業家「クロイゲル」と山師的

アーティスト「ツァラア」のイメージを重ねあわせることだったようだ。

というわけで、「厨房日記」の記述はツァラの人物像を想像力で塗り替えた作家一流の虚構ではあるが、ツァラもダダも知らない日本の読者に、その怪人めいた姿を彷彿とさせたいという作家の意図が伝わってくる文章ではある。もっと問題なのは、「ツァラア」と梶が（実際には横光利一が岡本太郎の通訳で）交わしたとされる会話のほうだ。

先ほど引用したとおり、「ツァラア」が、当時のフランスの政情について「もう良識は左翼以外にはない」と呟いて「葡萄酒のコップを上げた」というくだりは、この日（一九三六年六月一二日）がレオン・ブルムを首班とするフランス人民戦線内閣成立直後であり、屋敷の主人であるダダイストがすでに左派（コミュニスト）を支持する政治的立場を明確にしていたことから、ほぼ事実在即したものと思われる。

だが、来客たちが帰ったあとで「ツァラア」が梶とその友人（横光と岡本）を引き止め、書斎で懇談する場面に移り、日本とはどういう国かと聞かれて、梶が「日本という国について外国の人人に知っていただきたい第一のことは、日本には地震が何より国家の外敵だということです」と答えるあたりから、記述はフィクションへの傾斜を強めていく感がある。梶は、地震によって瞬時に破壊される日本の社会と文化の特殊性について長々と語り、「〔日本では〕一回の地震でそれまで営々と築いてきた文化は一朝にして潰れてしまうのです。すると、直ちに国民は次ぎの文化の建設を行わねばならぬのですが、その度に日本は他の文化圏の最も良い所を取り入れます」などと述べる。

そして、「全国民の知力の全体」が、ヨーロッパのように自然を変形せずに「自然を利用することのみに向けられる習慣を養ってきた」日本にヨーロッパの左翼思想が入ってきても、「どうしたって絶対に負けるのは左翼です。つまり、それは自然に反するからなんです」と梶は言い、「ツァラア」の左翼志向に反駁するのだが、「ツァラアは梶の友人の通訳を聞くとしたら聞いて

黙っていただけだった」と作家は書いている。

しかし、現実には、横光利一が、まるで準備してきたかのように当日初対面のツァラに全集版で一ページを超える発言を綿々と述べ、岡本太郎がそれをすべて律儀に通訳したとは想像し難い。したがって、この場面もある程度は事実にもとづくとはいえ（地震が話題になったかもしれないが）、「厨房日記」は紀行文ではなくて小説なのだから当然ではあるが、後日の創作の要素が相当介入しているだろう。この箇所では、彼はツァラへの（おそらく直接本人には言えなかった）反論のかたちで、当時の日本の知識階級の「種族の知性〔自然を重視する国民性〕と論理の国際性〔左翼思想に通じる普遍性〕との分別し難い暗黒面」（「厨房日記」）を批判したかったにちがいない。

最後に、梶は「シュールリアリズムは日本では成功していますか」と「ツァラア」に訪ねられるが、「日本ではシュールリアリズムは地震だけで結構ですから、繁昌しません」と言いたかったものの結局何も言えずに、「ただ駄目だと云っただけで」友人とツァラ邸を後にするのだが、このくだりは妙にリアルである。

当時のフランスの状況を少しだけ振り返っておけば、一九三六年五月の総選挙で勝利した左翼連合は、六月四日に社会党のブルムを首班とする人民戦線内閣を成立させ、横光利一がツァラ邸を訪問した前日の六月一日には、週四〇時間労働、二週間の有給休暇などを内容とする画期的なマティニョン協定が、労働総同盟（CGT）との間に締結されていた。こうして、一九三六年六月は歴史的な転換点となったのだが、ちょうどこの月に、ツァラはアラゴン、カイヨワ、モノロ（マルチニック出身の社会学者で、当時二八歳）らと「人間現象学研究集団機関誌（Organe du groupe d'Études pour la phénoménologie humaine）」と銘打って雑誌『糾問（Inquisitions）』創刊号を刊行した（雑誌の装丁はツァラの妻グレタによる）。横光利一が岡本太郎と訪れた夜の集いにカイヨワが来ていたとすれば、『糾問』グループの会合だったのかもしれない。

この雑誌は上記研究グループが同年一月から三月まで開催した連続セミナーの記録であり、ツァラは二月一八日の会で行った「社会の中の詩人 (Le poète dans la société)」と題する報告で、一九三一年の詩論「詩の状況に関する試論」中の（書かれた詩より広義の）「精神活動としての詩」を強調する主張を再確認して、「詩のさまざまな顕現 (les manifestations de la poésie) を、人間の思考 (la pensée humaine) の普遍化された領域中に位置づけなければならないだろう」と述べていた。巻頭にはバシュラルの論考「超合理主義」が掲載され、またカイヨワが「戦闘的正統派のために：現代思想のさし迫った任務」と題する宣言的文書を発表するなど、新しい時代の知性を予感させる意欲的な雑誌だったが、結局一号で終わった⁽¹⁸⁾。

話を横光利一に戻すと『欧州紀行』の（一九三六年）「六月一七日」の記述には「パリー出発。ストラスブルク [=ストラスブール] へ」とあり、その後諸国を歴訪してシベリア鉄道で帰国したので、ツァラとの再会の機会はなかった。パリではツァラの言葉どおり、少なくともこの時点では左翼（人民戦線）が勝利を取めたのだが、その様子をまのあたりにして圧倒された感がある左翼嫌いらしい日本の小説家は、「梶はヨーロッパが左右両翼に分かれて喧々諤々としている中を無雑作にシベリアを突っ走り、日本へ帰るとすぐ東北地方へ引き込んだ」（「厨房日記」）と書くほかはなかったのである。

太平洋戦争中は菊池寛の影響もあって国粹主義・軍国主義の信奉者となり、「われ等アジアの全文学者、日本を先陣とし、生死を一にして偉大なる日の東洋に来らんがため力を尽さむ」⁽¹⁹⁾と宣言した大東亜文学者大会にも出席したという横光利一（川端康成らも参加）が、ツァラのアヴァンギャルドな詩と詩論を少しでも理解しようとした痕跡はどこにもない。「最近日本文学の新しい傾向は、老人の趣味に一致することを最も純粹と見做し、最も無気力な、自慰的な人間探究に過った亢奮を感じている」という、先ほど引用した坂口安吾の一九三三年の痛烈な言葉は、あたかもこの「新感覚派」の作家に向けられていたかのようだと言ったら、言いすぎだろうか。

とはいえ、この稀代のダダイストとの一夜の出会いを書きとめた横光利一の文章は、モンマルトルの邸宅でツァラと直接会話した数少ない日本人の貴重な証言として今なお歴史的価値を維持しているのだから、瀧口や坂口らとはまったく別の視点から、あえて取り上げておくことにした。

本稿をつうじて、私たちの国へのツァラ導入の最初期の記憶と記録が散逸せずに、これまで以上に利用しやすいたちで伝達されることを願っている。

注

- (1) 《Le nez de Cléopâtre: s'il eût été plus court, toute la face de la terre aurait changé.》(*Pensées*, 162 [éd. Brunschvicg]) なお瀧口修造は一九二九年に「クレオパトラの娘の悪事」という散文詩を発表しているが、もちろん本稿と直接のかかわりはない。
- (2) 《DADA NE SIGNIFIE RIEN》. 《Que chaque homme crie: il y a un grand travail destructif, négatif à accomplir. Balayer, Nettoyer.》*Manifeste dada 1918 in Dada et tatou Tout est dada*, Flammarion GF, 1996.
- (3) 『高橋新吉全集』第四卷(青土社、一九八二年)所収「年譜」による。
- (4) 『薔薇・魔術・学説』は西澤書店刊復刻版(一九七七年)による。以下、ツァラの宣言原文は前出の *Dada et tatou Tout est dada* から引用。邦訳はツァラ『ムッシュー・アンチピリンの宣言 ダダ宣言集』(塚原史訳、光文社古典新訳文庫、二〇一〇年)による。「ダダの作詩法(Pour faire un poème dadaïste)」は第八である。
- (5) ツァラのダダのアフリカ、オセアニア起源については、塚原史『アヴァンギャルドの時代』(未來社、一九九七年)・『切斷する美学』(論創社、二〇一三年)などを参照されたい。
- (6) 瀧口修造「ダダと超現実主義」全文とその発表の経緯などは『コレクション瀧口修造』第一一巻(みすず書房、一九九一年)による。以下の引用も同書にもとづく(〔 〕内は筆者の補足、他の引用中も同じ)。
- (7) *Dada et tatou Tout est dada*, Flammarion GF, 1996.
- (8) 安吾の訳文は筑摩文庫版『坂口安吾全集』第一巻(筑摩書房版、一九九九年)から引用。ツァラの原文は上記 *Dada et tatou Tout est dada*, Flammarion GF, 1996による。塚原訳は注(4)の光文社版及び『トリスタン・ツァラの仕事II』(思潮社)参照(今回訳し直したものもある)。
- (9) アンリ・ベアール編『ツァラ全集』第一巻(フラマリオン、一九七一年)、Fran-

çois Buot, *Tristan Tzara, l'homme qui inventa la révolution Dada*, Grasset, 2002 (フランソワ・ビュオ『トリスタン・ツェラ伝』塚原史・後藤美和子訳、思潮社、二〇一三年) 参照。

- (10) Philippe Soupault, «DE NOS OISEAUX—TRISTAN TZARA» in *Manomètre*, No. 4, 1923. この紹介文で詩集の版元がストック書店 (Librairie Stock) となっていることは、先にふれた幻の一九二三年版が印刷されてスーポーの元に届いていたことを実証しているが、この版は結局市場に流通しなかった。
- (11) 坂口安吾「FARCEに就いて」は一九三三年三月に雑誌『青い馬』第五号に発表 (上記筑摩版全集第一巻に収録)。
- (12) プルトン「シュルレアリスム宣言」邦訳は巖谷國士訳『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』(岩波文庫) などがあるが、この箇所は筆者の訳文による。また、ツェラ「ダダ宣言1918」邦訳は注(4)の塚原史訳光文社古典新訳文庫版参照。
- (13) 坂口安吾「新しき文学」は一九三三年五月四～六日に日刊紙『時事新報』に連載 (上記筑摩版全集第一巻に収録)。
- (14) 改造社版『横光利一全集』第五卷 (一九四九年) から引用。〔 〕内は省略および筆者の補足 (以下同じ)。なお本稿の横光利一に関する記述は注(5)の『切断する美学』と一部重なっている。
- (15) 第二次大戦後では、アンフォルメル画家で長年パリに住んだ今井俊満 (1928-2002) が、サンジェルマン・デ・プレのカフェ (ドゥー・マゴとフロール) でツェラとよく出会ったと筆者に語ったことがある。筆者がフランス政府給費生としてパリ留学中の一九七七年頃のことである)。
- (16) 塚原史『アヴァンギャルドの時代』(未来社、一九九七年)・『切断する美学』(論創社、二〇一三年)などを参照されたい。
- (17) 改造社版『横光利一全集』第二〇卷 (一九四九年) から引用。
- (18) C N R S (フランス国立科学研究センター) 発行の *INQUISITIONS* 復刻版 (1990) 参照。
- (19) 「日本学芸新聞」一九四二年 (昭和十七年) 十一月一五日号。